

梅花のこころ

大船渡市・安養寺住職

葛西修哉



ある時「梅花のこころとは何ですか」と尋ねられました。常に梅花の心を大切にしましょう。と書いています。このようにストリートに尋ねられると、遺憾ながら、満足できるような答えを持ち合わせませんでした。改めて自問自答をしております。

確かに、梅花にはいろいろな決まりがあります。それを元とし、それを外さないように近づけて学んでま

いるのですが、それを百パーセント完全に出来るという事はあり得ないでしょう。私自身できません。でもそれでもいいのではないかとも思います。

日々の生活を大切に

その瞬時瞬時に精進することが、即ち『詠禅一如』と言うとおり、禅の教えの本質でありましょうから。恐らくは、梅花流が始まったときの本分はこれだったのでないかと思えます。誰もが気軽に親しんで、曹洞宗の教えを学んでいくというのではなかったかと思えます。と同時に

『作法は宗旨』と言うが如く、日々の生活を大切にしている自分を有り難いものとして、更には他者をも敬っていくということに気付いて行くということだったのでないか。言い換えれば、謙虚さを忘れないで生きることに思えてなりません。

とするならば、私を含め指導に携わる方、学ぶ方一同、梅花に対する捉え方を、今一度振り返る時期に至っているのではないか、そのような気がします。

確かに詠唱をしつかりする、作法をきちんとする、そのための精進をするのはご修行ですから、有り難い

ことですが、そのみが目的となりすぎているように思えてなりません。そして、それができなければいけないのだ、という傾向が強いのではないか、とも思います。

梅花はやはり仏の教え

梅花は有り難い、という法悦感が薄れてしまい、逆に束縛感にとらわれてしまっている講員さんも意外に多いのではないか、そんな気がします。

皆、それぞれが違うのですから、その持ち味を活かしながらの梅花であるように、指導していくことが大

切なように思われます。かつそのことよって、むしろ逆に教えられることが多々有るのですから、有り難いことだと思っております。それ故、梅花は決して上下の関係のみではないような気がいたします。

ここに至って、慈悲の心の有り難さが、身にしみて参ります。それはとりもなおさず、講員さんに当てはまるでしょう。多くの講員さんは、それこそ音楽の知識に薄い方でしょう。そういう方々が一生懸命に梅花符にてこずりながら、お唱えし、足の痛さにもめげずに鈴鉦を鳴らす。そのお姿が尊い、だからこそ自然に礼拝の対象になるものと思えます。

梅花はやはり仏の教えなのです。仏への純粹な帰依心の現れが、梅花なのでしよう。

それが「梅花のこころ」のように思えてなりません。